

資料紹介

沖縄県立博物館・美術館所蔵の沖縄神社社殿図、首里城正殿平面図（拝殿）及び仲座久雄の神社図面—資料紹介と考察—

前田 孝和（非文字資料研究センター 客員研究員）

I 本資料紹介の経緯と資料区分・資料名

神奈川大学非文字資料研究叢書 4『首里城と沖縄神社——資料に見る近代の変遷——』（加藤里織・後田多敦・他編著、以下「同書」という）に沖縄県立博物館・美術館^(註1)（平成 19 年〔2007〕以前は沖縄県立博物館、以下「同館」という）所蔵の沖縄神社社殿図、首里城正殿平面図（沖縄神社拝殿）、県社創立願書（沖縄神社）など 9 点を、編著の加藤里織・神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員が紹介している。その成果を踏まえ、未紹介 2 点を含めて、ここであらためて紹介し、若干の近代沖縄神社神道史での位置づけと考察も加えたい。

紹介する資料は、同書の最終編集段階で同館に所蔵されていることがわかり^(註2)、令和 5 年（2023）11 月 29 日、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターによって撮影された。それらは、以下の 5 区分 12 点の資料である（○数字は同館の登記番号による筆者の区分、5 桁の数字及び名称は登記番号、資料名）。

- ① 01435 首里城平面図、01436 首里城正殿平面図、01437 首里城正殿内部図、01438 首里城正殿側面図の 4 点
- ② 02369 琉球那覇港及び首里城間の図の 1 点
- ③ 14185 沖縄神社社殿図（本殿正面図・断面図・「県社創立願書」）及び「沖縄県内務部預り 社殿図 大正十三年三月」と墨書された封筒の 4 点
- ④ 15729 首里城平面図の 1 点
- ⑤ 18084 神社様式図及び解説、18085 基壇・礎盤・円柱・方柱・料拱・束類図の 2 点。なお、「18086 斗・虹梁・海老虹梁・木鼻図」、「18087 臺股図」も同館所蔵であるが、今回は撮影されていない。

これらの資料は区分ごとに別々に蒐集され、蒐集順に登記番号が付与されている。

図面の描かれた時代背景を考えると、次のように古い順番に並び変えることができる。②の琉球処分後の那覇港と首里城の間（県都）が描かれた地図（明治政府の出先機関、地名、首里城の施設名などが記載）、④の首里城構内の建物配置図、すなわち新旧建物配置図、③の大正 12 年（1923）3 月創立許可の沖縄神社本殿図面及び県社沖縄神社創立願書、①首里城正殿の沖縄神社拝殿への改修図面、⑤の神社様式、社殿部位の図面——の

順番である。これらの資料は、近代沖縄神社神道史を如実に物語っているものである。

II 沖縄神社の創立、鎮座、県社昇格

これらの資料に関わる沖縄神社は、祭神が舜天王、尚円王、尚敬王、尚泰王、源為朝公の 5 柱、首里城跡地が境内地として大正 14 年（1925）12 月 24 日に鎮座した神社で、琉球処分後の沖縄初の新設の公認神社である。大正 11 年（1922）12 月 26 日に県社創立願書を内務省神社局に申請、翌大正 12 年（1923）3 月 31 日いわゆる社格が未だ定まっていなかった無格社として創立許可された。同年 4 月 15 日に地鎮祭斎行、9 月に着工した。旧金蔵跡に本殿を建て渡郎殿（幣殿、祝詞殿）、拝殿を新築、社務所を設け（新設か世誇殿の移転再利用）、鳥居を建て、朽廃していた首里城正殿を取り壊し、その跡地は拝殿前庭とする計画であった。ところが工事中の大正 13 年（1924）春に首里城正殿の保存が決まり、伊東忠太らの働きによって沖縄神社拝殿とすることになった。

正殿は拝殿として大正 14 年（1925）4 月 24 日付で古社寺保存法による「特別保護建物」に指定され、国費による修復の道が開かれた。県社昇格のため沖縄神社奉賛会評議員会は大正 15 年（1926）2 月 1 日、法人たる「沖縄神社」に奉賛会所有（那覇市）の境内地 2,318 坪 9 合 3 勺、本殿（屋根銅板葺、5 坪 1 合）、拝殿（旧首里城正殿、瓦葺 3 階建、167 坪 9 合 1 勺）、社務所（旧世誇殿、瓦葺平屋建、56 坪 3 合 4 勺）、預金 5,461 円 36 銭を寄付することを決定した。内務省神社局は同年 10 月 20 日付で県社昇格を認めた。昭和 3 年（1928）に「県社沖縄神社特別建造物修復工事」がはじまり、昭和 8 年（1933）11 月 23 日に当初予算を 26,000 円超過した総工費 96,000 円を以て竣工、12 月 1 日に沖縄神社に引き渡された。昭和 4 年（1929）7 月 1 日付で拝殿は「国宝」に指定された。官幣小社波上宮に次ぐ位置づけとなり、10 月 19 日の前夜祭、20 日の例祭は秋祭りとして県民に親しまれた。正殿は、昭和 20 年（1945）4 月 18 日の戦禍で焼失するまで「県社沖縄神社」拝殿として使用され続けた。沖縄神社は再び昭和 37 年（1962）2 月 11 日に那覇市首里鳥堀町の弁ヶ嶽の一角に小祠が建立された^(註3)。



Ⅲ 琉球那覇港及び首里城間の図



資料①「02369 琉球那覇港及び首里城間の図」縦 61.8 cm × 横 88.8 cm (沖縄県立博物館・美術館所蔵)

これは昭和 40 年 (1965) に長嶺敏子氏が同館に寄贈したものである。那覇港から首里城周辺にかけて描かれた地図で、那覇港周辺には、三重城、西村、東村、儀間村、湖城村、若狭町、久米村、泊村、古波蔵村、真壁村、真和志村、大中大瀬村、赤ヒラ村、盛村の村名、首里城地域には、首里城 (正殿、北殿、南殿、世誇殿と思われる施設が四角で描かれている)、継世門、歓会門、久慶門、守礼門のほかソノハン御嶽 (園比屋武御嶽のこと)、エンカク寺 (円覚寺・臨済宗)、カウトク寺 (広徳寺・臨済宗) などの施設名が記されている。また警視出張所、二等郵便局など、那覇港周辺には内務省出張所、本願寺、孔子廟、浪之上などの名称も見える。沖縄神社が鎮座する以前の那覇、首里の様子が理解できる地図である。

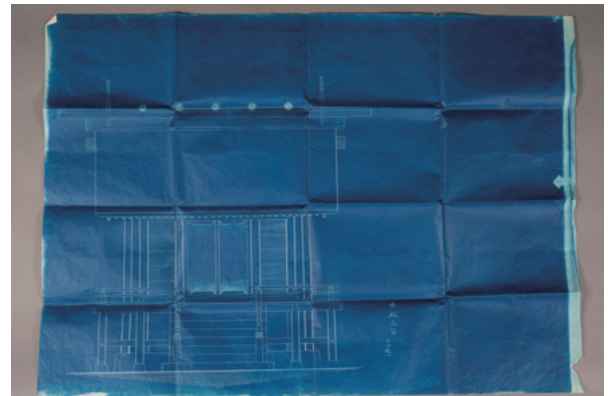
この地図は印刷物で表装されている。作図者、作図年は不明であるが、「内務省出張所」(明治 12 年〔1879〕の琉球処分出張所は廃止、庁舎は沖縄県設置後に仮県庁となり、2 年後の明治 14 年〔1881〕に正式に沖縄県庁となる)、本願寺 (浄土真宗本願寺派、西本願寺、明治 12 年民家で開教) の名前があることから、琉球処分直後のもので、近代沖縄神社神道史が具体的にはじまる以前の県都地域の地図である。

Ⅳ 沖縄神社社殿図

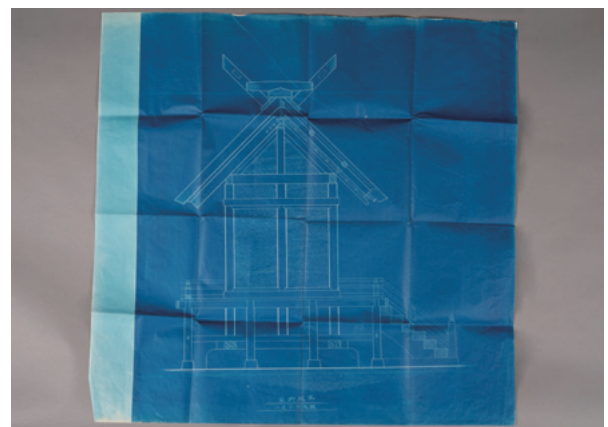
沖縄神社社殿図は、「本殿正面図」、「本殿断面図」の 2 枚の青焼き (青図) 図面、「県社創立願書」(B 版の 6 頁、6 頁目は白紙)、「沖縄県内務部預り 社殿図 大正十三年三月」と墨書された茶封筒で構成され、資料はこの封筒に同封されていたと考えられる。平成 6 年 (1994) に同館が沖縄で古美術「卯庵」、京都で書籍・雑誌卸「洛東書院」を営んでいた伊藤勝一氏から購入したものである。



資料②「14185 沖縄神社社殿図」のうち資料名が付与されていない茶封筒 (沖縄県立博物館・美術館所蔵) B5 版 (縦 25.7 cm × 横 18.2 cm) が収納できる角 3 以上のサイズ



資料③「14185 沖縄神社社殿図」のうち「本殿正面図」青焼き (青図) 縦 78.0 cm × 横 108.7 cm (沖縄県立博物館・美術館所蔵)



資料④「14185 沖縄神社社殿図」のうち「本殿断面図」青焼き (青図) 縦 78.1 cm × 横 80.3 cm (沖縄県立博物館・美術館所蔵)

神々の鎮まる社殿は正式には本殿というが、一般的に

神殿ともいう。本文では、資料名として本殿と神殿が使用されているため、本殿と神殿を併用している。

本殿正面図、本殿断面図

青焼きの正面図の右側には「本殿正面 十分之一」、断面図の下側には「本殿断面 縮尺 拾分之一」とそれぞれ書かれている。両図面から次のことが判る。本殿は神明造り、その特徴は簡素直線式、切妻造平入、銅板葺である。屋根には千木が左右に各1本、鯉木が5本あり、伊勢の神宮^(註4)の外宮の別宮の形式を踏まえたものである。木階は6段、正面扉は観音開きである。棟持柱も添えてある。軒下外周（木階を上った大床の外周）には廻縁を設け、勾欄（欄干とも書く。木階最下段の左右にも）が据えられ、その勾欄には擬宝珠が被せられている。社殿の廻縁の柱は礎石で受け、本殿本体の柱は、礎石より一段と盛り上げたコンクリートの礎石で受け止めている。礎石から千木までの高さが約6メートル、屋根の頂部の水平な棟である大棟の長さは約6.4メートル、木階を除く側面は約4メートル、木階最下段を含め側面は約5.3メートル。礎石から木柱6段を上った大床まで約1.2メートル。広さは5坪1合であるが、いわゆる3間×2間の本殿である^(註5)。



参考資料①沖縄神社神殿（本殿）の写真（沖縄神社発行の絵葉書の神殿を拡大したもの。個人蔵）

そもそも神明造は、大社造、大鳥造、住吉造と前後して起こったものと推定され、横に広がった長方形であり、妻入が平入に変更になったものである。神明造が校倉式を踏襲したため棟持柱は力学的には機能的にそれほど役立っていないといわれる。神明造の典型的な例は伊勢の神宮の正殿（本殿）であり、内宮正殿に限って唯一神明造と称される。神宮の神明造は掘建柱である。

なぜ沖縄初の新設の社殿に神明造が採用されたのであろうか。明治時代になって伊勢の神宮と直接関係がなくとも神明造が流行し、例えば明治2年（1869）創立の札幌神社（現北海道神宮、旧官幣大社）、明治33年（1900）創立の台湾神社（台湾神宮、旧官幣大社）、大正8年（1919）創立の朝鮮神社（朝鮮神宮、旧官幣大社）をはじめ北海道、外地でも神明造の本殿が数多く建築されるようになった。流行の理由の一つは、構造的に簡素かつ直線式であり、そのため意匠を凝らした造りではないため造作も容易であることであろう。沖縄県の建築技手となった仲座久雄が昭和17年（1942）8月に描いた「村社計画鳥瞰図」（後述・参考資料⑦）も神明造である^(註6)。

なお、左記の参考資料①の沖縄神社本殿写真からも理解できるように、本殿の規模や形状、千木、鯉木の本数など正面図と断面図の通り竣工している。また、三段構造の境内の一番高い三段目に本殿が、二段目に燈籠、狛犬が設置されている。

県社創立願書

「本殿正面図」、「本殿断面図」、「県社創立願書」が入っていた茶封筒の表面に「沖縄県内務部預り 社殿図 大正十三年三月」と墨書されている。その大正13年（1924）3月は、本殿建設中（前年の大正12年〔1923〕9月工事着工）であり、首里城正殿を取り壊して新たに拝殿を建てる計画が変更になり、正殿を沖縄神社の拝殿に転用して保存する動きが具体化した時期（大正13年〔1924〕3月下旬）に当たる。

沖縄県の神社行政の担当部署も内務部（社寺兵事課）であるため、正面図と断面図（側面図）、募金の案内に添えられた県社創立願書（「県社創立ノ義ニ付願」）が保管されていたとしても何ら不思議ではない。

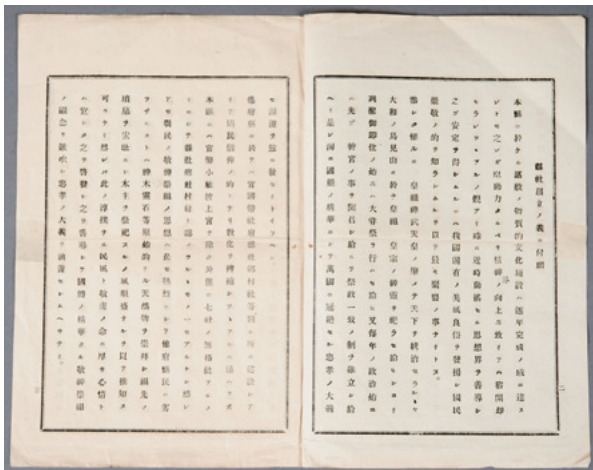
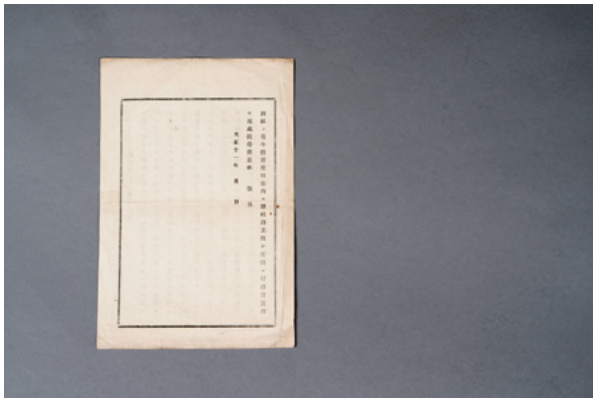
「県社創立願書」は印刷物で、B5版6頁、最終頁は白紙。もともとはB4紙を半折して綴じてB5版にした文書である。内容は二部に分かれている。

第一部は配布相手に沖縄初の新設の県社沖縄神社の創立の「賛襄」を願う本文3行の文書で、協賛の具体的な内容はここには記されていない。第二部は、「県社創立ノ義ニ付願」の見出しがついた文書で、県社創立願書である。末尾に「県社創立ノ義特別御詮議ヲ以テ御許可相成リ様致シ度別紙調書相添ヘ此段奉願候也」とあり、別に「調書」を添えることも記してある。この「県社創立願書」を協賛依頼文に充当したものと思われる。

これらの文書はいずれも「大正十一年 月 日」と月日が空白であるが、この文書の原案となる起案が存在する。それは那覇市歴史博物館が所蔵する「尚家文書1570」の「県社創立ノ義ニ付願」（仮称）というもので、同じくB5版6頁の文書である。第一部の「賛襄」の文章の日付が「大正十一年八月 日」（傍点筆者、以下同様）となっている以外は同文である。第二部の文書



(6 頁目は白紙)の「県社創立ノ義ニ付願」は27か所が加除修正されている。加除修正で趣旨が変わることはなく、起案には「県社ヲ奉祀」とあって県社の社名はなかったため「今般創立セントスル県社ハ沖縄神社ト称シ」と加筆され、社名が「沖縄神社」であることが明示された。



資料⑤「14185 沖縄神社社殿図」のうち「県社創立願書」縦 26.2 cm × 横 17.5 cm の B5 サイズで 6 頁
また、県社創立の目的は、「他府県ニ於テハ官国幣社

府県社郷村社等到处ニ建設シアリテ国民信仰ノのトナリ教化ヲ裨補シツ、アルニ係ハラズ本県ニハ官幣小社波上宮ヲ除ク外僅ニ七社ノ無格社アルノミニシテ県社郷村社ト認メラルハモノ一モアルナシ然レドモ県民ノ敬神崇祖ノ思想ハ最モ熱烈ニシテ他府県ニ劣ラザル」ため「淳僕ナル民風ト敬虔ノ念ニ厚キ心情トハ宜シク之ヲ啓発シ之ヲ善導シテ国体ノ精華タル敬神崇祖ノ觀念ヲ鼓吹シ忠孝ノ大業ヲ涵養セシムヘキナリ」である。

境内地を首里城跡に定めたのは「東宮殿下ノ鶴駕ヲ駐メサセ給ヒタル聖境ニシテ舜天王以来七百年間本県政治ノ中心トナリ本県ノ文化啓発ニ最モ関係深キ首里城址」だからとしている。

この起案は、8 月以降修正され、その上であらためて 12 月 26 日以前に印刷されたものが本書となる。本書が実際の申請書と思われるが、その申請書は大正 11 年 (1922) 12 月 26 日に埼玉嗣朝ほか 96 名の氏名を以て内務省神社局へ提出された。明治 22 年 (1889) の波上宮の国幣中社及び官国幣社の設立申請と形式内容は類似している。申請書である「県社創立願書」に添付されていた「調書」には「祭神及神社名、由緒、社殿、鎮座地及境内地、建造費及び其ノ処分方法、維持方法」が記載されていたと思われる^(注7)。なお、創立願書の「翻刻」内容は同書である『首里城と沖縄神社——資料に見る近代の変遷——』を参照していただきたい^(注8)。

V 首里城平面図、首里城正殿平面図、内部図、側面図



資料⑥「15729 首里城平面図」サイズ不明 (沖縄県立博物館・美術館所蔵)

この図面名は「首里城平面図」で、下部に「面積一万八千八百三十一坪 千分之一」と書かれ、右下最下部には朱色の「島袋蔵書」印がある。城内には旧正殿、旧藩主及王妃居室・旧王子室・旧二階殿、旧ノ□ナミ居室、旧西殿、旧南風殿、旧世誇殿、旧鎮間及書院、旧用物奉行所、旧金殿、旧寝廟殿のほか奉神門、広福門、歓会門などの名称が見える。図面には「旧金殿」(傍点筆者)

と「奉神門」などとあり、ともに明治42年（1909）に売却されているため、表記法に統一性がない。「凡例」として赤線が境界線、灰色が石垣、蜜柑色が建物、黒色の横線が階段である。

大正または昭和初期に何かの資料をもとに千分の一の縮図の「首里城平面図」として描いたものであろう。この資料は平成9年（1997）に島袋良徳氏が同館に寄贈したものであるが、作図者、作図年は不知である。

次に紹介する首里城平面図、首里城正殿平面図、内部図、側面図の4点は、同館が昭和30年（1955）に建築家の仲座久雄から購入した彩色図面である。



資料⑦「01435 首里城平面図」縦51.1 cm × 横87.1 cm（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

これは「旧首里城平面図」であり、「1/500」「面積一万八千八百三十一坪二合四勺七才」と記され、「凡例」として黒（境界線）及び茶（石垣及び壁）・灰（岩石）・黄（現在ノ建物）・桃（旧建物ノ跡）、青（溝及び井）の各色で示されている。

同様の図面が、『琉球建築』（田辺泰・巖谷不二雄、座右宝刊行会、昭和12年〔1937〕10月1日発行、1972年に田辺の単著として同会から改定版発行）に掲載されている。初版本は「旧首里城平面図 縮尺五百分之一 面積一万八千八百三十一坪二合四勺七才」（参考資料②）と記され、500尺の縮尺記号が下部左下に表示され、正面下部枠外に「首里城復元図（首里市）」とある。「首里城復元図」としての「旧首里城平面図」である。初版本（昭和12年〔1937〕）と改定版（昭和47年〔1972〕）は、内容は同一であるが、その違いは、施設名が右書きから左書きに変更され、また改定版では「尺図五百分之一」、「面積一万八千八百三十一坪二合四勺七才」の文字は削除され、縮尺図は300尺15mに変更になっている。

資料⑦の本図と『琉球建築』に掲載された「首里城復元図」との大きな違いは、色分けされた凡例が「首里城復元図」にはないことである。本図では既に建物がないものは桃色で記されているが、「首里城復元図」は首里城の施設の復元図であるため、例えば「奉神門」跡も「奉神門」と描かれている。

『琉球建築』掲載の「首里城復元図 首里市」は昭和9、10年の助成金で田辺が作図したもので、前述の資料⑥「15729 首里城平面図」、資料⑦「01435 首里城平面図」、さらには昭和6年（1931）に正殿修復に関わった文部技官の阪谷良之進が作図した「旧首里城図」（参考資料③）を参考にしているかもしれない。



参考資料②田辺泰・巖谷不二雄『琉球建築』（神奈川大学日本常民文化研究所蔵）に掲載された「首里城復元図（首里市）」である「旧首里城平面図」。田辺は昭和12年（1937）の初版本で巖谷との共著としたが、昭和47年（1972）の改訂版では田辺の単著となっている。図面内容は初版と同一であるが、表記法に相違がある。本図は昭和9、10年（1934-35）の助成金で調査作図したものである。

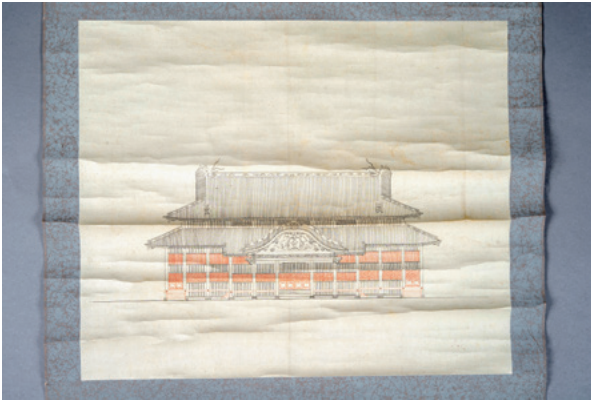


参考資料③正殿修復にかかわった文部技官の阪谷良之進が昭和6年（1931）に作図し、保管していた「旧首里城図（縮尺六分一）」の彩色図。サイズ不明（沖縄県立図書館所蔵）。「凡例」として旧建物は黄色、境界線は黒色破線、神社区域は黒色点線、石垣は緑色、建物は桃色をはじめ道路、溝及び井、雑木林、草地、岩及び地勢、畑地が記されている。

次頁の資料⑧、⑨、⑩も、前述の通り、同館が昭和30年（1955）に仲座久雄が保管していたものを購入

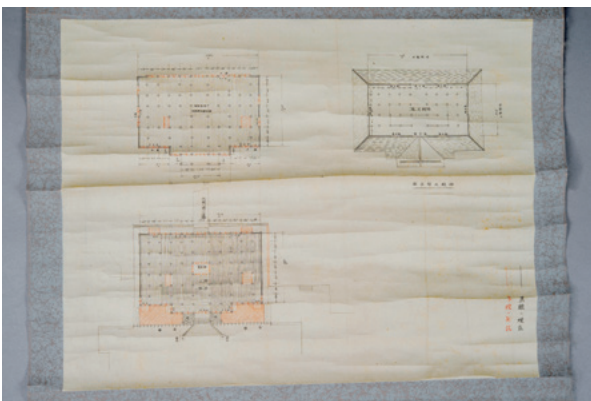


したものである。仲座は沖縄神社拝殿（正殿）の修復が終わった昭和8年（1933）に大阪から沖縄に戻っているため、それらは正殿修復時に仲座が作図したものではない。しかし、後年に参考資料④⑤⑥を参考にして模写した可能性は否定できない。後述するように、昭和の修復時に工事関係者が作図した「国宝建造物沖縄神社拝殿図」と関係があると思われる。



資料⑧「01436 首里城正殿平面図」縦 40.6 cm×横 48.9 cm（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

資料⑧「首里城正殿平面図」は、実際は正面図である。一階正面壁は霧除け、連子、扉などで構成されているが、連子全部、扉の上部と正面扉の上部、左右端の扉全部などが朱書きされている。また正面扉（入り口部分）の四枚扉は四角模様である。図面の朱色は「新設」（次の図面に「朱線ハ新設」「黒線ハ現在」とある）のことであり、改造を意味している。屋根の大棟、下棟の左右、向拝上部には龍頭棟飾が見られる。本図は基壇上部のみの図面であるため正面入り口の石階段、大小の龍柱は描かれていない。



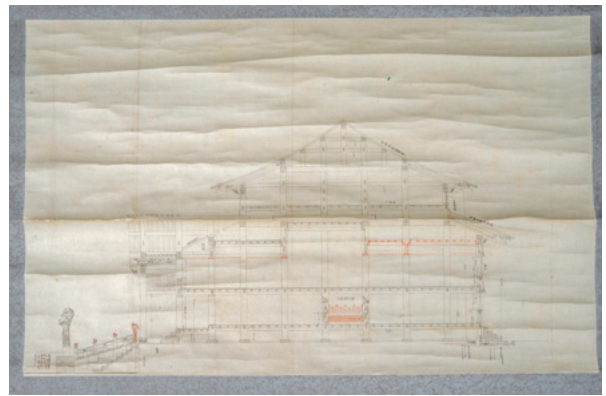
資料⑨「01437 首里城正殿内部図」縦 44.1 cm×横 57.1 cm（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

「首里城正殿内部図」には上段部分に2図（三階と二階の内部図）、下段部分に1図（一階の内部図）の3図描かれており、右下余白に「黒線ハ現在」「朱線ハ新設」と

とペン書きされている。図面右上部の「拝殿三階平図」は格子窓の文字が見える。三階には朱線はないため、大きな改造の対象ではなかったようだ。

図面左上部の中央部分に「拝殿二階 神社宝物陳列所」と記されており、拝殿修復竣工以降、二階は宝物殿として活用された。また「連子」「中マド」も見える。左右に一階へ通ずる階段が朱色で描かれているので改造されることを意味している。

図面左下部は「階下 拝殿」の図面である。朱線で描かれているのは、一階の裏側（拝殿裏側）左右2か所に入り口と階段、内部中ほどの左右2か所の上階へ上る階段、中央の「御差床」、下方の向拝の左右部分などである。拝殿裏側中央の階段部分に「本殿二通スル道路」と書かれてあり、参道を意味する。



資料⑩「01438 首里城正殿側面図」縦 45.7 cm×横 72.1 cm（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

これは首里城正殿の側面を描いた図である。三階部分は「屋根瓦葺漆喰塗り」、「三階格子窓」、「三階床」、二階部分には「連子」、「中マド」、「羽目板」、「化粧裏板張り」、一階部分には「国王之御座所」（中央部分）、「中マド」、「ヌキ」、「出入口高」、土台部分には「敷瓦」、「土塁石垣」の文字が見え、「国王之御座所」、小龍柱、大龍柱の台座の継ぎ足しは、朱書きである。「国王之御座所」は除去を意味し、小龍柱は何らかの手を加え、右側の大龍柱は継ぎ足して左右同じ高さに改修することが示されている。

本図は右側面図であるのに対し、参考資料④「国宝建造物沖縄神社拝殿図」は左側面図である。

ここで最も興味深いのは、同書で加藤里織氏が指摘しているように、「在来龍柱高低アルニ付同高サニ根継キ石ヲナシ現在正面向キヲ古代ノ通リ向合ニ据直スコト」と、大龍柱についての注意書きがあることである。

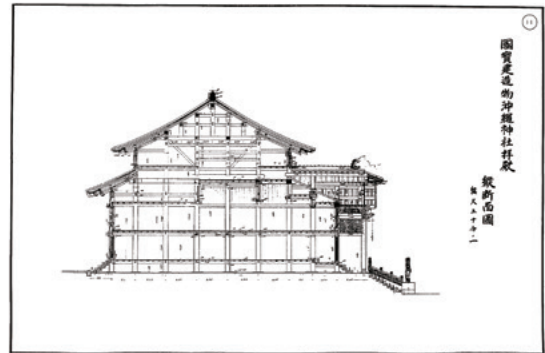
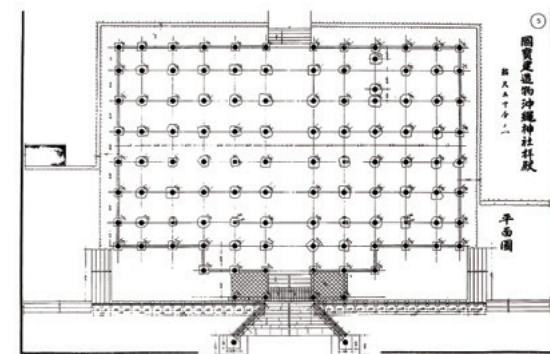
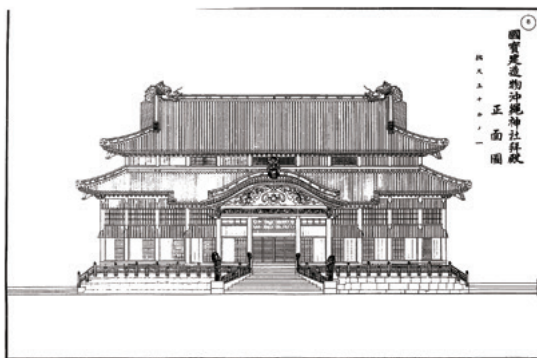
「古代ノ通リ向合ニ据直スコト」が大きな意味を持つが、何を意味しているのだろうか。作図者は、大龍柱は、本来は「向合」（相対向き）であり、何らかの理由で正面向きに変更されて今日に至っているという理解である。その根拠は示されていない。『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（乾隆33年〔1768〕）、『百浦

添御普請絵図帳』(道光26年〔1846〕)にある相対向きの大龍柱の図面などを参考にしたものであろうか。

次に考えられるのは、図面名は「首里城正殿」であるものの沖縄神社拝殿への転用、正殿を拝殿として改修すべき点を指した図面であるという点で、大龍柱も、神社の付属工作物という認識である。これを前提とするならば、神社の参道に設置されている狛犬は、基本的には相対向き^(注9)であるため、作図者は拝殿前の「龍柱」を狛犬と見なして「古代ノ通り向合ニ据直スコト」と表記したのであろうか。

ただ、同書での後田多敦氏の論考や同書掲載の明治初期の写真(明治10年「Temple dans la cour du palais de l'Ô-Sama〔王様の神殿〕」、ルヴェルトが写真)などから、大龍柱の本来の姿は、正面向きである。そのため、昭和時の拝殿としての修復時に、「古代ノ通り向合ニ据直スコト」との整合性はない。しかし重要な意味をもつ図面と表記である。

前出の3点の首里城正殿平面図、内部図、側面図と比較できるように昭和の修復時に旧文部省が製作した前述の「国宝建造物沖縄神社拝殿図」(複製、沖縄県立図書館所蔵)の県社沖縄神社(旧首里城正殿)図面のうち、相対する正面図、縦断面図、平面図(一階部分)を参考資料④⑤⑥として下記に示した。



参考資料上段から④⑤⑥。昭和の修復時に旧文部省が製作した「国宝建造物沖縄神社拝殿図」(複製本、沖縄県立図書館所蔵)サイズは各々縦31cm×横43cm。上段④は「国宝建造物沖縄神社拝殿 正面図 縮尺五十分ノ一」、中段⑤は、「国宝建造物沖縄神社拝殿 平面図 縮尺五十分ノ一」、下段⑥は「国宝建造物沖縄神社拝殿 縦断面図 縮尺五十分ノ一」である。

上記の参考資料④⑤⑥は「国宝建造物沖縄神社拝殿」の本格修復時期の昭和5年(1930)12月5日から同7年(1932)7月5日の間に「国宝建造物沖縄神社拝殿修理事務所」(工事関係者)によって作図されたものと推察される^(注10)。

いずれにしても資料⑥「15729 首里城平面図」(1000分1)、資料⑦「01435 首里城平面図」(500分の1)及び参考資料④⑤⑥の「国宝建造物沖縄神社拝殿図」は、修復工事にかかわった阪谷良之進が昭和6年(1931)に作図し保管していた参考資料③の「旧首里城図」(縮尺6分1、彩色、沖縄県立図書館所蔵)、そして『琉球建築』の「旧首里城殿舎復元配置図」と関係があると思われるが、詳細は不知である。

Ⅵ 仲座久雄の神社様式及び解説、細部図

以下の2点は、平成14～15年(2002～2003)に仲座巖氏より同館に寄贈されたものである。それらは昭和17年(1942)4月及び5月に沖縄県建築技手仲座久雄が描いた神社社殿様式及び社殿部位の図面であり、それぞれの図面に資料名と作図年月が記載されている。

仲座久雄(明治37年〔1904〕～昭和37年〔1962〕)は、沖縄県中城村字津波に生まれ、大正10年(1921)から大阪で勤労・勉学、建築学を学んだ。拝殿(正殿)修復が竣工した昭和8年(1933)に沖縄に戻り、各工事現場の監督員、設計を担当、昭和11年(1936)には国宝建造物守礼門修理工事主任、翌昭和12年(1937)沖縄県経済部土木課建築技手補・技手となり、愛楽園庁舎・災害復旧工事の設計監督、戦時中は空襲後の都市計画、疎開後の建築の指導をおこなった。敗戦後は海軍軍政府工務部などに勤務、昭和27年(1952)



沖縄群島政府工務部課長を退職、仲座久雄建築事務所を再開、数々の施設の設計をした。文化財保護活動にも従事した。「花ブロック」を考案・普及させた人物でもある。

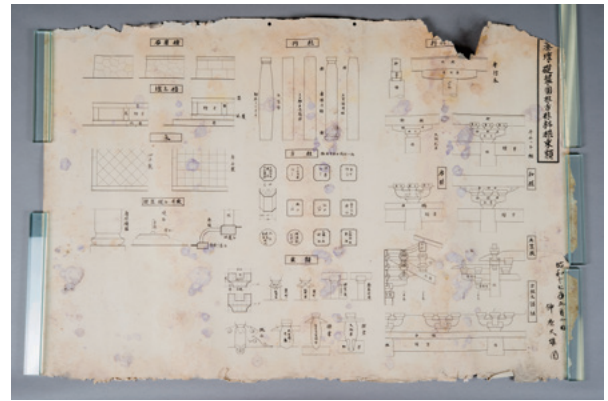
仲座が沖縄県庁土木課に入った昭和12年(1937)前後から19年(1944)までは、県内に公認神社を建築する計画案を実現しようとしてつづつあった時代である。県内5郡に県社の新設・昇格、御嶽を合併して村社を設け、祭神は「天照大神」と御嶽の神々を併せて祀るという計画で、県下58市町村(大東島含む)の904の御嶽を合併・廃止して69社を建て、それらの村社の末社として257社を設けるという壮大な計画である。その計画は昭和18年(1943)10月に「沖縄県神社創立計画案」として中央政府の神祇院に提出している。すでに民間が御嶽を「模擬構造」の神社として本殿、拝殿、鳥居、燈籠などを建てて「神社」と称する例が各地に多く存在していた。戦時の厳しい中であって計画案は、行政の混乱、資材不足などの複合的な理由で、特に十・十戦争以降は何ら進捗することなく、敗戦となった。

そのような背景の中で、仲座の描いた未撮影を含めた神社の様式、細部部位図の4点は昭和17年(1942)4月から7月頃に描かれたものである。その作図時期は沖縄県神社創立計画案を纏め、県社や村社建設計画を具体化し出した時期にあたる。そのため、仲座は神社設計の下準備としてこれらの図面を何かを参考にして描いたのであろうか。



資料⑪「18084 神社様式図及び解説」縦68 cm×横100 cm (沖縄県立博物館・美術館所蔵)

図面に左上部に「神社様式」(破損あり)、右端中央部分に「昭和十七年四月二十五日 仲座久雄図」とあり、上段に右側から「神明造」「住吉造」「住吉神社」「大鳥造」「大鳥神社」「大社造」「出雲大社」の著名な4種の社殿様式の正面図、平面図が描かれ、それぞれの下段にそれぞれの特徴が書き記してある。



資料⑫「18085 基壇・礎盤・円柱・方柱・料拱・束類図」縦69 cm×横100 cm (沖縄県立博物館・美術館所蔵)

図面右上部に、「基壇・礎盤・円柱・方柱・料拱・束類図」、同じく右下部に「昭和十七年五月二日 仲座久雄図」との覚書がある。

図面は縦三列になっており右が「料拱」(破損あり)、中央が「円柱」「方柱」「束類」、左が「石崖積」「壇上積」「床」「礎盤・礎石・亀腹」、また「料拱」は更に詳しく「和様」「唐様」「天竺様」「出組及詰組」の絵図と部位の名称が書かれている。

なお、未撮影の仲座久雄の作図の「18086 斗・虹梁・海老虹梁・木鼻図」(縦68 cm×横100 cm)と「18087 墓股図」(縦68 cm×横101 cm)の2点も前記同様にそれぞれの部位を描いたものであろう。

次頁の参考資料⑦は仲座が昭和17年(1942)8月に描いた「村社計画鳥瞰図」であり、仲座の未紹介2点を含めた前記資料群4点と連作と推察される。鳥瞰図所蔵の南城市教育委員会のホームページの説明文に「戦前、斎場御嶽が神社化される計画の際に描かれたとされる」(<https://nanjo-archive.jp/document/?detail=2441&genre=2>)とあるが、斎場神社の創建の動きは昭和18年であり、それは県社である。「村社計画鳥瞰図」は昭和17年8月と記名されている以上、沖縄でこれから御嶽の合併などを経て御嶽に社殿を建て、公認神社の村社を設けるためのイメージとして描かれたと考えるのが妥当である。この簡素な鳥瞰図は、多くの人びとに村社のイメージを植え付けたことであろう。ではなぜ旧知念村(現・南城市)に保管されていたのかは不明である。



参考資料⑦仲座久雄作図「村社計画鳥瞰図」サイズ不明
(なんじょうデジタルアーカイブ・南城市教育委員会所蔵) 昭和 17 年 8 月仲座久雄の作図

この鳥瞰図には、本殿、祝詞殿（幣殿、渡殿）、拝殿、手水鉢、鳥居が描かれている。本殿と拝殿は神明造で屋根に左右それぞれ千木各 1 本、千木の間に鯉木 5 本が据えられている（沖縄神社と同様）。祝詞殿と拝殿は土間形式で四方に壁はなく四方開放型で、本殿以外は簡素であり、経費削減型社殿と言ってよく、御嶽の神社化が容易に成し遂げられるように配慮した図面と思う。

VII 終わりに——非文字資料としての沖縄神社関連図面

以上紹介した資料は、資料区分を、琉球処分による那覇港から首里城正殿の様変わりを描いた地図（資料区分②）、琉球処分によって正殿での琉球王府の政治が終わり、正殿施設は「旧」施設となり（資料区分④）、その直後に熊本鎮台沖縄分遣隊が駐留・撤退し、施設・敷地は首里市のものとなって、一部分は入札売却され、首里城跡地を境内地とする沖縄神社建設が決まり、創立願書が作成・申請され、旧「金蔵」跡に沖縄神社本殿が建設され（資料区分③）、解体予定だった正殿が沖縄神社拝殿として修復改修され（資料区分①）、御嶽を合併しての御嶽の神社化（村社化）と 5 郡への県社昇格・新設のための諸図面（資料区分⑤）——という順番に並び替えることができる。それによって、首里城正殿の、そして沖縄神社拝殿の歴史が明らかになる。

同館は沖縄に関する資料を蒐集するという目的はあっても、蒐集時期、蒐集経緯もバラバラであるため、明確な同館の蒐集「意図」を、そこに見いだすことはできない。しかし、近代沖縄神社神道史という視点で見直し、かつ前述のように資料区分を並び替えることにより、よ

り時代を反映した資料としてその資料的価値を高め、近代沖縄神社神道史を物語る貴重な資料となっている。

また、沖縄神社の創立願書（資料区分③）は文字資料であるが、この文書の原案となる起案文書的那覇市歴史博物館所蔵「県社創立ノ義ニ付願」（添削後の内容は創立願書と同文）を併せて見ることによって変更点が明らかになり共に重要な文字資料である。更に対比するための「非文字資料」的価値も見いだすことが可能となるのではないだろうか。

各図面は首里城正殿から沖縄神社拝殿への変容の姿を見取れる資料群でもある。

最後に、諸図面の作図者、作図年月日は不知であり、また多くの図面資料などとの比較検討はできていないが、その点は専門家諸氏の知見を得たいと思う。

【注】

1. 博物館と美術館が併設された複合施設。首里の中城御殿跡に昭和 21 年（1946）に誕生した「沖縄民政府立恩納博物館」、昭和 41 年（1966）に新たに開館した沖縄県立博物館が前身であり、平成 19 年（2007）11 月 1 日に沖縄県那覇市おもろまち 3 丁目 1 番 1 号の現在地に美術館を併設して沖縄県立博物館・美術館として開館した。愛称は「Okimu（おきみゅー）」。
2. 『改定沖縄県立博物館 収蔵品目録 下巻（1981-2000 年度）』（沖縄県立博物館、2002、pp. 37）。また令和 5 年 10 月 20 日の沖縄神社例祭のおり、沖縄神社の図面があることを嵯峨井建氏から教授いただき、後日、図面 1 枚を見せていただいたが、この時点では所在不明であった。これらの資料は多くの研究者が首里城に関心があっても、結果的に首里城正殿を拝殿とすることになった県社沖縄神社には興味を示すことなく見過ごされてきたこと、同館のホームページ検索で画像が荒いながらも本殿図面、創立願書、首里城正殿平面図など一部は公開されていたが、容易く有効活用できる状況ではなかった——などの理由で、一般に周知されてはいなかったようである。
3. 沖縄神社の歴史については、神奈川大学非文字資料研究叢書 4『首里城と沖縄神社——資料に見る近代の変遷——』（加藤里織・後田多敦・前田孝和編著、近現代資料刊行会、2024）の第 5 章「県社沖縄神社の歴史と祭祀」（pp. 310-347）を参照。
4. 伊勢の神宮は、一般的に伊勢神宮と称され、正式には、単に「神宮」という。天照大神を祀る内宮、豊受大神を祀る外宮を中心に伊勢市内外に合計 14 所の別宮、43 所の摂社、24 所の末社、42 所の所管社の計 125 社の総称である。別宮は内宮、外宮に次ぐお社とされる。
5. 建築様式は『神社建築』（山内泰明、神社新報社 平成 19 年〔2007〕、pp. 39-63、165-188）を参照した。
6. <https://nanjo-archive.jp/document/?detail=2441&genre=2>、令和 6 年 4 月 7 日アクセス。
7. 大正 2 年（1913）4 月 21 日内務省令第 6 号「官国幣社以下神社ノ祭神、神社名、社格、明細帳、境内、移転、廃合、参拝、拝観、寄付金、講社、神札等ニ関スル件」。
8. 注 3 の pp. 352-354 を参照。
9. 注 5 の pp. 215-216 を参照。「狛犬の正しい姿勢形相は、共に参道軸に直角に据ゑ、社殿に尻を向けないで顔をやや正面外に向けてゐる」とあり、狛犬の基本形は相対向きである。
10. 『国宝建造物沖縄神社拝殿修理工事新設計内訳書』（沖縄神社拝殿修理事務所、沖縄県立図書館所蔵）の「国宝建造物沖縄神社拝殿修理工事工程書」に「実測製図 自昭和五年十二月五日 至昭和七年七月十日」とあることから推測した。